平 成 ２ ２ 年 ４ 月

[配布先：全組合員]

市 場 情 報

「日　時」　平成２２年３月１２日（金）正午 ～

「場　所」　東京「鉄鋼会館」

「出　席」　酒匂委員長他 １９名(最終頁参照)

「経　過」

１．委員長挨拶

更なる難局

回復の兆しが窺える分野もあり、相変わらず低迷している分野もあり、やや２極化の様相を呈しつつあるが、需要レベルは依然低水準のままである。メーカーによって当然スタンスは異なるが、母材値上げが相次いで発表されており、ユーザーの反応もまちまちである。とりわけシャー各社にとって、これからの対応が非常に難しく、皆さんは大変苦慮していると思われる。先々身動きが取れない状況の中、今年はまさに正念場である。この難局を何とか乗り切らねばならない。

２．各地区の需要動向

北海道（誌上参加）

建設需要の枯渇感、一層顕著に

今年で第６１回目のさっぽろ雪まつり。天候に恵まれ約３００基の大小様々な雪氷像がお出迎え。国内はもとより世界の国々から２４３万３千人と、これまで最高の観光客が見物した。多くの人々に愛された雪祭りもおおきな経済効果をもたらし無事終わり、陽射しも徐々に強まり雪解けも進み、ようやく春の兆しが訪れた。

道内経済については、景気回復の足取りが依然として弱く、信用収縮や雇用・所得環境が一層悪化。円高やデフレの悪循環が大きな不安要素となり、さらに財政悪化に伴う公共投資の削減などにより疲弊した経済に痛撃を与え、企業を取り巻く環境はより一層厳しさを増している。

〔鉄　　骨〕　建築統計平成２１年１～１２月道内鉄骨推計は１２万７２００トンで前年同期比３２．６％減少（本州物件を含む総鉄骨推計は１５万トン・前年同期比３１．８％減少）となり最

低レベルに落ち込んだ。また、鉄骨需要の先行きを示す昨年１１月から今年１月直近の共同積算数量は２万４４３５トンで前年度比 26.4%の減少となった。この数字が示す通り、需要構造の中心である建築鉄骨の冷え込みは著しく、一部のHファブを除き各社の工場稼働率は非常に低く、全体的に先が見えない状況が続いている。

道内の需要構造は官公需頼みの現状、公共投資に厳しい現政権の政策で公共事業や農業基盤整備事業予算の大幅削減から、食料増産体制に向けた農業関連施設の先送り。加えて民間需要の低迷により、道央圏の大型プロジエクトの延期。住宅投資や設備投資の冷え込みが続いており、平成２２年の建築需要は統計史上最低レベルになるのではと懸念されている。

［橋梁］平成２１年度は、景気浮揚に向けての公共投資の大幅増で、前年度比３０％増の２万５５００トンを見込んでいた。しかし政権交代による公共事業の見直しにより２万２８００トンで前年度比１６％の増加にとどまった。平成２２年度については、前年度比１９％減１万８４００トンの見込みで更に厳しく、補正・ゼロ国、老朽化の進んだ橋の延命・耐震対策、補修・補強としての落橋防止装置や鋼製床版工事など早期発注が強く期待されている。

〔切板の状況〕　道内の需要構造は建築・土木・橋梁が中心であり、昨年からの継続建築プロジエクト案件もほぼ一段落、橋梁も消化された。ファブの稼働状況は一部のHを除いてH・M・Rの工場稼働率は５０～７０％と、全体の切板数量をカバーするには程遠い状況である。建設関連は政権交代により期待された農業基盤整備事業、農業関連施設の先送り、道央圏の大型プロジエクトも今年は期待できず、需要回復は見込めない。先の見えない状況が続き、量的な枯渇感は一層顕著になり深刻度がより増すものと憂慮されている。

切板価格は、鉄骨価格の急落により、ファブからの指値は一層厳しさを増している。出血・値引き合戦をしても大幅受注増に繋がらないが、電炉・高炉材切板価格、本州ファブが道内ファブへ外注鉄骨切板価格の大きな値差と情報錯綜。需要不信に加え切板受注価格の採算ラインを大幅に下回る下落は、この先さらに状況の悪化が予想されるだけにより深刻な事態である。

高炉メーカーは、「国際市況の先高基調や鉄鉱石、原料炭を含む資源騰勢により、店売り向けおよび建築鉄骨向けの厚板価格の大幅値上げ、今後の原燃料価格の動向次第では、さらなる価格改定を。」と発表された。内需色の強い建設投資は低迷、依然として復調の兆しがみえず実需不振の状況下、需要家に切板製品価格を粘り強く理解を求めるが、転嫁切板価格の値上げに対してゼネコンやファブの強力な抵抗が想定される。メーカーからゼネコンに対し強力に値上げ要請をしないと理解は得られない状況にある。

道内の建築業界は長期にわたる公共投資の抑制と過当競争で疲弊している。今後、与信問題は一層深刻さを増し、また、実需不振から仕入れ抑制を継続する中で、需給バランスを示す在庫率の改

善が急務である。

（玉造㈱・西村卓也）

東　北

シャーの工場稼働は５０％がやっと

東北地方の寒さは、例年よりも特に寒く感じましたが、スイセンの蕾も膨らみ徐々に春の気候になりつつあります。

東北地方の景気は、いまだに厳しい状況が続いています。全体感としては、公共投資は前年を上回りましたが、厳しい収益環境のもとで設備過剰感や需要の先行き不透明感が強く、設備投資が落ち込んでいますが、宮城県内では、セントラル自動車を始めとしてトヨタ自動車関連企業と東京エレクエレクトロンも内容の見直しもある様ですが、来年前半にも工場稼動を見据えて動き始めています。さらにはハイブリットカーの需要増大を背景にパナソニックＥＶエナジーが車載用電池を増産する計画があり、工場増設を検討している様です。

この様に暗い話ばかりでは有りませんが、足元はまだまだ厳しい状況であり、シヤーの工場稼動は５０パーセントがやっとの状況です。メーカーの値上げ発表を受けて、先高感が出始めたのか、引合いが少し増えていますが、地場物件の少ない東北ではやはり首都圏物件が頼りとなります。

一日も早い業況の回復を願うばかりです。

（ＪＦＥ 鋼材・庄子　悟）

東　京

鉄骨は年央以降回復か。橋梁は惨憺たる状況に。

１．Ｈ２１年度４Ｑ（見込み）

〔全 体〕　橋梁の低迷と鉄骨の急減により、各社の稼働率は大幅低下。各社臨時休業を取得し、凌いでいる状況。在庫は過去３年間で最低レベル（２１．１千㌧）となるものの、生産の急減から在庫率は2.7ケ月とむしろ悪化している。（ＭＩＮ１．８ケ月、適正２．０ケ月）

〔橋　梁〕　Ｈ２１ＦＹ上期の入札量が、当初見込み（全予算の８０％）から大きく減少したことと、補正予算が大幅に遅れ、下期の入札がずれ込んだことにより、下期の発注量が大幅に減少した。特に4Qは、例年年度末の集中発注があるが、今年度は各ファブとも空きが出ている状態であり、例年にない極めて低いレベルとなる見込み。

〔鉄　骨〕　設備投資関連や中小商業ビル等は、H20下以降ストップしたままだが、首都圏の大型案件は大きな計画変更もなく継続している。但し、切板ニーズの高い主力ファブが 1～5 月頃まで、端境期に入っており、1月以降急減している。

２.今後の動向

〔全 体〕

・鉄骨の需要は６月以降回復する見込なるも、もう一方の柱である橋梁が、夏場以降～年末頃 まで惨憶たる状況となることが予想され、各社稼動の確保を含め極めて厳しい状況となる見込み。

〔橋　梁〕

・Ｈ２２年度の入札は、過去最低の２０万ﾄﾝ程度と見込まれており、加えて上期は国交省や各自治体も政府の政策が見えず、様子見の状況が見込まれる。

・Ｈ２３年度予算がどのように組まれるかによって動き出すことが予想され、入札は下期に集中することが予測される。

・従って、我々の生産は、４～６月頃まではＨ２１．４Ｑ並みか、それをやや下回るレベルが見込まれるが、６月後半～７月以降は極めて深刻なレベルまで落ち込むことが推定され、回復は、早くとも秋口～年末になると思われる。

〔鉄　骨〕

・設備投資や中小建築案件の中止により、中小ﾌｧの稼動は惨楯たる状況。しかし、超高層ビル案件には、今のところ大きな計画変更は見られず、Ｓファブ対象案件は高水準。

・一部ファブは端境期にあるが、６月以降回復に向かうと見込まれ、そこから１年間程度の仕事量はあるとの見込み。

・しかしながら、鉄骨単価・ＢＨ単価の急落により、海外ファブ活用のメリットが低下しているのも事実であり、加えて精工ＰＤのＢＨの寸法精度がかなり悪く、現場で相当苦労しているとの情報もあるため、今後の動向を注視する必要有り。

（富士鉄鋼センター・井沢純司）

東　京

建機の一部に底打ち感

（全体）

新興国向け輸出の緩やかな回復や製品の在庫調整に目途が立ち始めた事もあり、受注の落込みは概ね底を打った感がある。

しかしながら、部会シヤーの受注分野の違いや需要家の扱い品目により回復感にも跛行性がみられ、また加工量もピーク時からみればまだまだ低水準ではある。

アジア特需により国内生産回復がやっと見え始めたが、需要家は我々に対し大幅なコスト低減を要請、さらに国内工場の統廃合や部品の海外調達、新興国での事業強化等を加速させ、部会シヤーは国内市場の縮小と原価低減という非常に頭の痛い難題を抱えている。

（建産機）

建設機械の１月出荷額は、前年比＋１５．７％で１６ヶ月振りの増加。これはショベル系急増の結果であり手放しで喜べないが、‘10 年度上期以降の回復に期待したい。

・油圧ショベルは、中国向けを中心とした輸出回復の影響で加工量はピーク時の 60％前後まで戻っており、建機の中では唯一「優等生」といえる。

・建設用クレーンは内外需共低迷。　内需は公共工事や住宅着工の減少で、外需は北米・中近東・アジア向けの中断で受注はほぼ１／３。　回復は１０年度下期にずれ込みそう。

・ダンプは資源開発需要の影響から、輸出案件が出始めている。資源開発向けの商談は、大型建機を含む一括受注が一般的であるため、他機種への波及効果に期待を持ちたい。

　都市型ダンプは残念ながら、生産回復の兆候は全く見えない。

（板金・鍛圧機械）

板金機械はようやく在庫調整に目途。それでも需要家の生産はピーク時の約１０％程度国内向けはそれほどではないが、新興国向けの輸出で受注回復。　自動車向けプレス機械の受注回復は全く見えておらず、打ち手のない状況が暫く続きそう。　本格的なＨＶ化・ＥＶ化まで期待できないとの悲観論まで出ている。　鍛圧機械工業会全体での１月受注をみると０７年の半分レベルまで回復しており、今後の生産増に繋がる事を期待。

（重電）

・重電は、昨年まで好調を持続していたが、今年夏からの大型案件まで一服状態。１０年後半からは原発案件が連続しており５年以上続く模様だが、一方で国際競争の激化により部品の海外調達の増加も懸念されており、価格面での厳しさは益々高まるとみられる。

（店売り）

産機店売りは、前回報告同様低迷が続き、稼働が５０％～７０％といった状況。

製鉄メーカーの値上げ発表と川下の末端需要家とは状況認識に大きな乖離があり、我々の価格転嫁は困難が予想される。仕入高・製品安の赤字受注は何があっても避けたい。

（ニューエイジ・池田啓志）

東　京

目が離せない

浦安地区の状況は、在庫調整はおおむね完了したものの、相変わらず販売は低位で底這っている。仕事量は極めて少ない。メーカー値上げの動きが色々出始めているが、今のところ市場の反応は鈍く、仮需すら発生していない。スクラップは東鉄の炉前購入価格が３．５万円所で推移しており、上伸基調にある。こうした中で、与信不安が日々強まっている。取引先から一刻も目が離せない状況だ。

（三ノ橋鋼材・角田善彦）

東　京

茫然自失の感あり

橋梁、鉄骨、そして一般店売り分野ともにすべて低調である。唯一期待が持てた大型建築案件もここへきて端境期入りから一頃の勢いが消失している。一方、建産機は底打ち感が出始め、いくらかの明るさが射してきた。しかし店売り分野は、荷動き不振のもと、メーカー値上げの発表があり、今後どのように対応するのか茫然自失の状態である。一般建築シャーは仕事の確保すらできず、２番底の危惧は回避されていない。在庫は月を追って減少しているが、歯抜けサイズが出るなどバランスが悪化してきている。その上メーカー値上げ分が転嫁できなければシャー業界の死活問題となる。加えて、資金繰り、与信管理も切迫した難題であり、経営環境は一段と厳しさを増している。

（丸東興業・秦　弘志）

新　潟

低 稼 働 続 く

日増しに暖かくなり、すぐそこまで春が近づいておりますが、取りまく環境は依然として厳しい状況が続いています。

新潟県の建築に関してですが、０９年に建設された鉄骨量として推定５７０００トンと言われ、０８年度対比３４％の減少となっています。

着工面積でも、０９年度は０８年度対比で２５％の落込みとなっており、今年の１０年１月の単月では、前年比５％減、前々年比３３％減と減少傾向が続いています。そうした状況の中で、地場建築案件は、病院や再開発案件、家電やスーパーなどの店舗といった物件が出件されていますが、どの物件に関しても、コストダウン要求が強く、鉄骨ファブの加工賃が極端に下落しており、採算面から手が出せないようなケースもみられます。

関東案件を主体に加工するＨグレードファブは、材料の先高感からか、見積り件数の増加がみられ、直近は比較的受注も出来始めている様子ではありますが、鉄骨価格は依然として上がっていないと聞いております。

切板の状況は、このような建築関連の切板の減少はもちろんですが、産機や建機などの下請けや孫請けから発生するもの、プラント関連や製缶業者、土木向けといった紐付きではない、一般的に店売りと呼ばれる分野の切板も大幅に減少しており、改善の兆しが見えない状況が続いています。

新潟の厚板シヤー組合各社の稼働率も５０％前後で推移しており、雇用調整助成金の活用などで凌いでいる状況で、在庫も稼働率の低下から、まだ思うように減ってはおりません。

このように新潟地区においても、厳しい状況が続いておりますが、新聞などでは、具体的な値上幅が一部発表され始めております。

需要環境や他品種の値上浸透率から考えても、ユーザーへの転嫁は容易ではありませんが、しっかりとしたユーザーへの説明など行い、値上できる環境を整えたいと思います。

（藤田金属・多村嘉人）

東　海

仕事がない中でのメーカーの値上げ

東海地区 産機系 ヒモ付店売熔断業者の直近３ヶ月の仕事量は２００８年を１００％とすると２００９年は５０％、２０１０年は６０～７０％というのが大方でした。ヒモ付業者の中では、造船と鉄道車輌の仕事はピーク時の８０～９０％を保っており、又、産業機械では小型プレスの受注が回復してきてベトナムや中国向が出始め、大型のプレスは、今までまったく受注がなかったものが国内向に少し出始めました。半導体の組立機などの専用機なども今まで、まったく受注がなかったものが７０％ぐらいまで回復してきました。

建機は、小型のシャベルなどは少しずつ戻っている様ですが、大型に関しては受注が少なく小型が戻り始めているので、秋口以降大型にも動きがあるのではないかという事でした。昇降機に関しては建築が不振という事もあり、２００９年比３０％ダウン、２００８年比６０％ダウンとなりました。

一方、店売業者は、１月は少し良かったが２～３月はまったく仕事がないとか、１～２月はまったく仕事がなかったが、３月は少し良かったなどと各社それぞれになっており、自動車関係の設備は予定されたものがリコール問題などを受けて、２月に急に中止になる一方で、自動車の金型は少し回復したりとかしています。

ここまで書くと一見回復している様に思われますが、各社とも雇用調整金は続けていますし、仕事があったり、なかったりの差が激しく、それが過当競争を生み安売り合戦が続いて、各社とも赤字体質から抜けられません。

在庫調整は進んでいますが、極厚の板を中心に滞留在庫も多く在庫の単価も下がりません。特約店や薄板業者などは、品薄感とメーカーからの値上げを受け早々と値上げを開始していますが、厚

板に関しては、まだまだアナウンスをする程度で、なかなか値上げをするのは難しい状態です。

しかし、メーカー調達の原料炭、鉄鉱石、スクラップ価格の状況から見ても、海外への輸出状況を見ても、必ずメーカーは値上げをしてきます。少しは回復しているとはいえ、まだまだ厚板が一番仕事のない状況に変わりはありません。

そして３月を迎え、与信の問題にも気を使っていかなくてはなりません。

（鈴将鋼材・鈴木康司）

東　海

これからも続く建築不況

東海地区の建材系熔断業者の稼動は、当地区の建築物件が非常に少ない状態に変化は無く、５０％程度の工場稼働率となっております。従って、雇用調整金を利用した休業は継続しておりますが、仕事量が無くても内容が細かく、短納期対応から休業が取り辛い場面も散見されております。

橋梁については、３月までの仕事は堅調に積み上がっているものの、４月以降は落ち込む様相であります。

建築物件の見積りは、昨年末頃から材料値上げの話を受けて増加する傾向にありますが、見積りの中身は再見積り、再々見積りが中心となっており、新規物件の見積りは皆無に等しく、なかなか成約に辿り着かない状態になっております。

また、秋口以降の物件に対する見積りを求められるものの、メーカー値上げのスケジュールが見えない事から見積り回答が出来ない状況にあります。

在庫量については、仕入調整により、適正量の２～３ヶ月分にまで調整されてきており、規格、サイズによっては歯抜けも散見される状態になっております。

先行きの仕事については、当地区の物件がない事から、４～６月は更に厳しい建築需要環境が予想され、ファブは関東へと受注に走っている様子が覗えます。

各地区からの奪い合いによる厳しい受注競争となっているようであり、二番底への心配も感じられます。

東海地区のまとまった建築物件は、「東芝四日市」の復活があるものの、現時点では具体的時期は不透明な状態であり、「笹島地区再開発」、「新中経ビル」など、秋口以降から来年にかけてしか動かない物件ばかりであります。一方で、期待が持てそうなのは耐震需要がありますが、この建築不況はさらに７～９月までは続くと思われる状況です。

（中部鋼鈑・稲垣嘉久）

大　阪

メーカー値上げが収益圧迫要因に

１.全般

（１）成約物件は依然として少ないものの、引き合いは増加しており、下げ止まり感は見られる。

（２）在庫も、これらの動きを反映して、１２月は久しぶりに２００％を切ったが、１月は再び上昇し、２２７％となった。

（３）在庫については、各社必要な物しか手配していないことから減少しており、一部抜けも出初めているが、５０ｍｍＵＰは滞留している。

（４）４月から高炉メーカーは、１５，０００円／トンの値上げを打ち出しているが、現下の状況ではとても切板価格に転嫁できる状況ではない。

（５）特に厚板は、回復してきたとの報道は多いものの実感に乏しく、このまま進むと需要がないだけに、ひたすら耐え忍ぶしかないような状況が続くものと懸念される。

（６）また高炉の値上げは、国内から海外（特に中国）への移転が更に増加していく可能性があり、一部では前倒しで行っているところもある。

（７）近畿の企業倒産は減少傾向にあるが（５ヶ月連続で前年同月比がマイナス）、需要がなく、先行きも不透明なだけに予断を許さない状況が続く模様。

【参考】２月の企業倒産　－　東京商工リサーチ

	件　数		負債総額　（百万円）	
		前年同月比		前年同月比
全　国	1,090	−17.2	438,833	−64.2
近　畿	300	−12.5	30,637	−67.8

（注）１．全国・7ヶ月、近畿・6ヶ月連続で前年同月比減。不況型倒産の構成比は過去最高の 83.4%
２．大型倒産が減少し、小規模の倒産が増加（全体の６８．１％）

２．需要部門別

（１）橋梁

① 橋梁の発注量は、Ｈ２２年度は２０万トンといわれているが、更に落ち込み１８万トン程度になるとの見方もあり、各ファブは仕事量の標準化を図るため、後ろ倒しにしている。

② このままでは需要と供給のバランスが大きく崩れ、ただでさえ少ない物件を叩きあい、価格の減少と共に収益の悪化は避けられず、鋼材の値上げは更に拍車をかけることになる。

（２）鉄骨

①関西では、いわゆる４大物件と言われる大型案件が動き出し、好転しているかのようであ

るが、それ以外の物件は皆目見当たらず、大型物件を含めても低迷している。この傾向はＨ２２年度も続く模様。

②また、４大物件は量が多いものの価格が安く、操業度を確保しているというだけで、収益の向上にはほど遠い。

【参考】　１月の住宅着工面積

		面積（千㎡）	前年同月比	備　　考
全国	ＳＣ	3,003	−28.9	15ヶ月連続で前年同月比でﾏｲﾅｽ
	ＳＲＣ	375	34.3	11ヶ月ぶりに前年同月比でﾌﾟﾗｽ
	鉄骨需要量	32万ｔ	−6万ｔ	
近畿	非住宅	785	23.4	16ヶ月ぶりに前年同月比でﾌﾟﾗｽ

（３）建設機械

① 日本建設機械工業会の予想は、１０年度の出荷額は０９年度比＋１２％（０７年度の約半分）まで回復してくるが（国内＋１％、輸出＋１８％）、実感としてはそれほど増えてきているとはいえない。

（４）産業機械

① 設備投資も少なく、また高炉の値上げ等、好転する要素が見受けられないため、Ｈ２２年度も低水準で推移する見込み。

（シーヤリング工場・佐々木泰司）

九　州

はるか彼方に…

〔経済動向について〕

・平成２１年の九州地区の鉱工業指数は、前年比生産▲２０．３％、同出荷▲１９．８％と全産業で大幅な減少となった。　ただ平成２１年１～３月を底に輸出（中国）や国内景気刺激策により回復方向での推移とはなっている。

・ 平成２２年度の九州の実質経済成長率予測は、＋１．３％と３年ぶりのプラス成長と見込まれている。 内訳は、純輸出（＋０．９％）民間最終消費支出（＋０．６％）民間設備投資（＋０．１％）　民間住宅投資（＋０．１％）公共固定資本形成（▲０．４０％）となっている。

これは、中国を中心にした輸出と政策効果による民間最終消費は伸びる　ものの、民間設備・住宅投資は、平成２０，２１年度に大幅に落ち込みに歯止めが掛かる程度で、しかも主体は２２年度後半に若干動きが出る程度。

一方２１年度に大きく寄与した公的固定資本形成は、一転して大幅なマイナス要因となることを示している。

よって、九州地区の需要動向は、輸出関連企業よりの需要期待はあるものの民間設備投資、建築投資は依然として厳しい環境が継続し、当期後半にならないと動きは感じられず、かつ橋梁等の公共投資は更に落ち込み前年度に比し大幅な需要の好転は見込めない環境にある。

足下の九州厚板シヤー業界は、実需が一向に伸びず停滞した中、下げ率はやや鈍化したものの依然として不毛な価格競争を繰り広げている。どこももう一年近くこの競争に巻き込まれ疲弊しきっているのに戦い続けている。

物件状況等を勘案すると平成２２年度上期一杯は、この状況（溶断量約１６千㌧/月：前年比６０％）が継続され鋼材値上げが必須で仕入コストが大幅に上がりかねないのも関わらずトレンドは下を向いたままで推移している。

ただ下期以降は、さすがにちらほら案件の話もあり、経済動向のトレンドも上向き加減であり多少の明るさは感じるも公共固定資産形成（特に橋梁）は、回復することはないことを勘案すると順調に上向くわけではない。

雇用調整をしながら食いつなぐ環境は当面脱出でそうにない状況と思われる。

〔建　築〕　前期より更に建築案件は減少し、２月にはＨグレード３社、Ｍグレード数社が、丸一ケ月雇用調整休暇をとる事態になってきた。当然建築向けシヤーの溶断量は干上がり打つ手なしの状態となっている。

建築着工統計推移も低迷が続き非住宅着工床面積は、平成２１年度１Ｑ（４～６月）３８万㎡、２Ｑは４０万㎡、３Ｑは４５万㎡と若干戻し基調も、平時の基準（７０万㎡）と比べると依然２/３の水準。

Ｓ＋ＳＲＣ造の着工面積比も同様で、鋼材使用量も全体で３～３．５万ｔ/月（△４４％）と低位の推移であるが足下は、数値以上に厳しいのが実態と思われる。ただ先行指数の建築確認件数は、まだ低水準であるが平成２１年３Ｑでは１，３２８件と１Ｑ、２Ｑと比べる１５％程度増えており『微かな動き』かと感じる。

確定案件：熊本駅前再開発（Ｓ２千トン）、ハーミツトビル（Ｓ５千トン）
福岡赤十字病院(S4千㌧)、旭橋駅周辺開発(SRC3千㌧)、
渡辺通２丁目再整備(S6千㌧)

計画案件：鹿児島中央駅11番街区(S3千㌧)、宮崎駅西口(S2千㌧)、
福岡大中央図書館他(S5千㌧)

〔橋　梁〕　九州の橋梁フアブの受注状況は、低水準で１月、２月での橋梁受注は３社４件（１６

億円）程度で低調に推移しておりも期待できない状況にある。

〔自動車〕　九州の自動車生産は、２００９年度９８万台と２年ぶり増となる見通し。やはり日米の減税政策が押し上げた。

日産は当初計画より３万台増となったが、がトヨタ自動車のリココール問題の影響もあり、本格的な生産回復に繋がるかは不透明。

一方部品メーカー各社には、２０から３０％のコストダウン要請を突きつけている。

〔造　船〕　九州地区（九州運輸局内）の平成２１暦年建造量（竣工ベース）は約６，０００千総トンと推定され予測以上のピッチとなった。ただ新規受注は殆どないため契約残を食いつぶしている。

各造船所は、今後やはりピッチダウンし手持ち残で回復を待つ姿勢は変わりないと思われる。

＊ 結語 … 九州のおける厚板溶断需要の中心である建築の状況が上期一杯は回復の見込みが薄く我Ｉ慢の時期がまだ続く。

そんな中で鉄鋼メーカーの値上がありスタグフレーション状態になそうであり、よくユーザーとミルと会話し対策を打たないと　また板挟みになりかねない。もはや値下げ合戦の時期は過ぎ現状を見つめる時期に九州もきていると思う。

（終わりに、小職の担当は今回が最後でありお世話になりました。九州が立ち直ることを祈っています。）

（豊鋼材工業・嶋津邦夫）

３．髙木理事長の感想

皆さんの現状認識をお聞きして、各地例外なく厳しい状況であることを再確認した。

今年の需要全体の見方として、良くてピーク比５０～６０％レベルまでしか戻らないだろう。現下の公共投資の抑制、設備投資の低迷等から判断しても景気回復の道筋が全く見えない状況。需要規模の縮小は避けられない。いずれ回復したとしても、一番回復が遅いのがシャー業である。だから６０％の需要規模でも飯が食える経営基盤を構築しなければならない。こうした状況下で、メーカー値上げだ。驚天動地の如しである。３年前の水準まで逐次戻すのではないか。メーカーはロールタイトで国内向けに湯が回せない。世界各国のコスト構造が上昇していることで、国内需給に関係なく価格改訂を進めるかもしれない。何が何でもこの事態に対応していかねばならない。

一方シャー在庫は、昨年３月をピークにかなり減少しているが、なお根雪のように残っている。今回の調整局面を教訓して、メーカーに対して、リードタイムの短縮、短納期化、同期化の必要性を主張してまいりたい。また、一昨年より当業界で取り組んでいる“トレイサビリティ”問題についても、次のフェーズに移して対面業界と根気よく協議してくこととしたいので、是非ご協力をお願いしたい。

（（参考）　≡　出席者　≡　（順不同敬称略）

酒　匂　委 員 長
髙　木　理事長（ゲスト）
吉　里　総務委員長(ゲスト)
林　　東海支部長（ゲスト）
東　北　　庄　子　（Ｊ　Ｆ　Ｅ 鋼 材・東北）
東　京　　秦　　（丸　東　興　業）
池　田　（ニューエイジ）
井　沢　（富士鉄鋼センター）
角　田　（三 ノ 橋 鋼 材）
菊　地（神鋼鋼板加工）
長　澤（武部産業）
石　原（石原商事）
田　爪（徳和鋼材）
新　潟　　多　村（藤田金属）
東　海　　鈴　木　（鈴 将 鋼 材）
稲　垣　（中 部 鋼 鈑）
大　阪　　佐々木　（シーヤリング工場）
九　州　　嶋　津　（豊 鋼 材 工 業）
事務局　　柘　野

４．次回開催予定

平成２２年６月１２日（金）　１２時　　大阪ラマダホテル１６Ｆ